

平成 22 年 3 月 26 日
総 務 部 財 政 課

平成 20 年度決算における財務書類 4 表について

平成18年 8 月に総務省から示された「地方公共団体における行政改革の更なる推進のための指針」の中で、人口 3 万人以上の都市は平成21年度までに地方公共団体の公会計の整備の推進に取り組むことが要請されました。

滑川市では、これまで旧総務省方式に基づき普通会計の貸借対照表（バランスシート）を作成してきましたが、平成20年度決算から地方公会計改革に基づく「総務省方式改訂モデル」での財務書類 4 表の作成に移行しました。

1 作成基準

(1) 対象会計

- ・普通会計（一般会計）
- ・普通会計及び下記連結範囲

(2) 連結範囲

- ・公営企業会計
〔水道事業会計、下水道事業特別会計、農業集落排水事業特別会計、工業団地造成事業特別会計〕
 - ・その他の会計
〔国民健康保険事業特別会計、後期高齢者医療事業特別会計、老人保健医療事業特別会計、介護保険事業特別会計〕
 - ・滑川市土地開発公社
 - ・第三セクター等
〔(財)滑川市青少年婦人研修センター、(財)滑川市文化・スポーツ振興財団、(財)滑川市体育協会、(財)滑川市農業公社、(株)ウェーブ滑川〕
- 一部事務組合との連結財務書類については、本市と連携している一部事務組合の準備が整い次第、作成・公表していく予定です。

(3) 作成の基準日

平成 20 年度末（平成 21 年 3 月 31 日）

〔出納整理期間（4 月 1 日から 5 月 31 日まで）における収支については、基準日まで
に終了したものとして処理〕

(4) 作成基礎数値

昭和 44 年度以降の決算統計の数値をもとに作成

(5) 売却可能資産

普通会計で所有する普通財産のうち売却可能の土地を計上

（売却可能価額は、平成20年度固定資産税評価額を用いて算定）

(6) その他

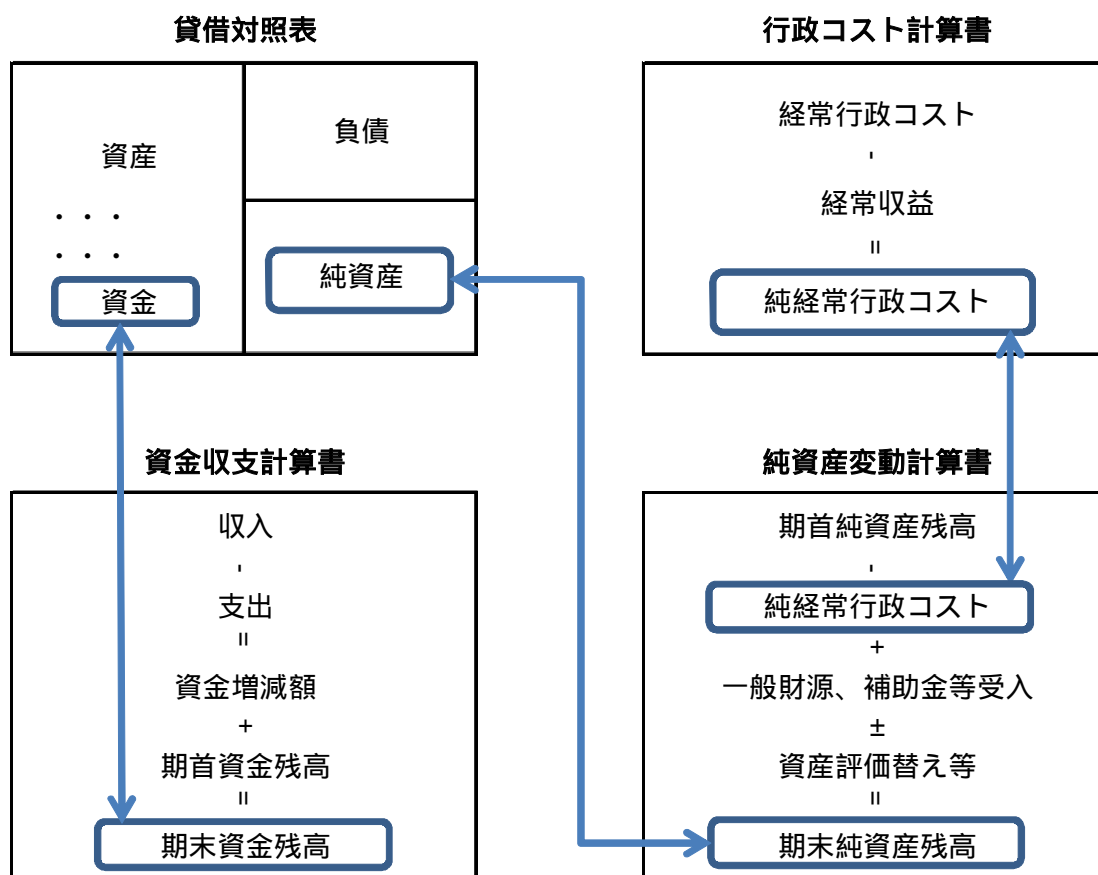
連結の範囲となる会計・法人等はひとつの行政サービスの実施主体とみなすため、普

通会計から公営企業会計への繰出金など連結対象の会計・法人等間で行われている内部取引は相殺消去しています。

2 財務書類4表

財務書類は、(1)貸借対照表、(2)行政コスト計算書、(3)純資産変動計算書、(4)資金収支計算書の4表です。それぞれの表が示す本市の平成20年度末の状況・分析について説明していきます。

財務書類4表の相関関係は次のとおりです。



(1) 貸借対照表

市が住民サービスを提供するために所有している財産（資産）と、その資産をどのような財源（負債・純資産）で賄ってきたかを表したものです。

「資産」には市が所有する土地・建物などの固定資産や基金、現金などを計上しています。「負債」は将来の世代に負担してもらおうお金のことで、主に今後返さなければならない地方債などを、「純資産」はこれまでの世代が負担してきたお金のことで、国県補助金や税金等の一般財源を計上しています。

【普通会計】

普通会計貸借対照表を簡単に表すと、次のとおりです。

資産合計 588億5千3百万円	負債合計 137億2千9百万円
	純資産合計 451億2千4百万円

この貸借対照表は、平成20年度末現在で、588億5千3百万円の資産があり、その資産は137億2千9百万円の負債と451億2千4百万円の純資産で形成されていることを表しています。

資産の部では、公共資産が543億6千7百万円で、資産全体の92.4%を占めています。そのうち、「生活インフラ・国土保全」が276億9千9百万円で公共資産の約半分を占め、道路・河川・公園等の整備に大きな事業費を投じてきたことがわかります。

市民一人当たりで換算すると、174万円の資産を、41万円の負債と133万円の純資産で形成していることとなります（平成21年3月31日現在の住民基本台帳人口33,913人を基に算出）。

【連結】

連結貸借対照表を簡単に表すと、次のとおりです。

資産合計 884億3千3百万円	負債合計 301億2千4百万円
	純資産合計 583億9百万円

平成20年度末における連結での資産合計は884億3千3百万円、負債合計は301億2千4百万円、純資産合計は583億9百万円となっています。

公共資産に対する純資産の割合（現世代負担比率）をみることで、現存する公共資産のうち、これまでの世代の負担（既に納付された税金等）でどれだけ賄われたかがわかります。現世代負担比率は70.4%で、この割合が高いほど将来世代の負担が少ないといえます。

市民一人当たりで換算すると、261万円の資産を、89万円の負債と172万円の純資産で形成していることとなります。

（２）行政コスト計算書

一年間の行政活動のうち、資産形成に結びつかない行政サービスに係る経費とその行政サービスの対価として得られた財源を対比させたものです。

【普通会計】

普通会計行政コスト計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

経常行政コスト	103億9千8百万円
(内訳)人にかかるコスト(人件費等)	20億1千8百万円
物にかかるコスト(物件費等)	36億1千2百万円
移転支出的なコスト(社会保障給付費等)	44億5千1百万円
その他のコスト(利息の支払い等)	3億1千7百万円
経常収益	4億5千7百万円
差引(-)(=純経常行政コスト)	99億4千1百万円

平成20年度の経常行政コストの合計は103億9千8百万円で、これらの活動に対し、経常収益は4億5千7百万円となっています。

経常収益は「使用料・手数料」と「分担金・負担金・寄附金」といった受益者負担の金額であるため、経常収益の経常行政コストに対する割合($= \div \times 100$)を見ることで受益者負担割合がわかります。この割合は平成20年度では4.4%になっています。

経常行政コストから経常収益を差し引いた「純経常行政コスト」は、99億4千1百万円となっており、この分は市税や国県補助金などで賄っています。

普通会計における市民一人あたりの一年間の経常行政コストは、31万円になります。

【連結】

連結行政コスト計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

経常行政コスト	164億5千9百万円
(内訳)人にかかるコスト(人件費等)	24億4百万円
物にかかるコスト(物件費等)	51億2千4百万円
移転支出的なコスト(社会保障給付費等)	81億4千万円
その他のコスト(利息の支払い等)	7億9千1百万円
経常収益	50億1千5百万円
差引(-)(=純経常行政コスト)	114億4千4百万円

連結でみると、普通会計と比べて移転支出的なコストが大きく増えており、そのうち社会保障給付費が57億4千5百万円で経常行政コスト全体の34.9%を占めています。これは国民健康保険や介護保険などの医療関係費による影響が大きいためですが、保険料や事業収益などの経常収益も大きくなっており、連結での受益者負担割合は普通会計と比較すると高くなり、30.5%になっています。

連結における市民一人あたりの一年間の経常行政コストは、49万円になります。

(3) 純資産変動計算書

貸借対照表内の純資産の部に計上された各数値が一年間でどのように変動したかを表したものです。

経常的なコストや財源のほかに、有形固定資産の減価償却に伴い、有形固定資産に充当

されていた国県補助金などの財源をその他一般財源へ振り替えるなどの科目振替処理も行われています。

【普通会計】

普通会計純資産変動計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

期首純資産残高	444億4千4百万円
純経常行政コスト	99億4千1百万円
一般財源	81億6千万円
補助金等受入	22億1千4百万円
臨時損益	8百万円
資産評価替えによる変動額	2億5千5百万円
期末純資産残高	451億2千4百万円

行政コスト計算書でも示した純経常行政コストが99億4千1百万円生じましたが、地方税などの経常的な一般財源が81億6千万円、補助金等受入が22億1千4百万円あり、これを差引すると、4億3千3百万円の黒字となっており、経常収入により純経常行政コストが賄えていることがわかります。

【連結】

連結純資産変動計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

期首純資産残高	573億7千5百万円
純経常行政コスト	114億4千4百万円
一般財源	81億6千万円
補助金等受入	39億7千1百万円
臨時損益	8百万円
資産評価替えによる変動額等	2億5千5百万円
期末純資産残高	583億9百万円

連結でみた場合も普通会計と同様の傾向にあり、純経常行政コストと一般財源・補助金等受入を差引すると、6億8千7百万円の黒字となり、経常収入で純経常行政コストが賄えていることがわかります。

(4) 資金収支計算書

一年間の現金の収入と支出の情報を3つの区分(経常的収支、公共資産整備収支、投資・財務的収支)に分けて表したものです。

「公共資産整備収支の部」には、公共資産の整備などによる支出とその財源となる補助金や地方債などの収入を、「投資・財務的収支の部」には、出資・貸付金や地方債の償還な

どによる支出とその財源である貸付金元金回収額などの収入を計上しています。

「経常的収支の部」には、人件費や物件費などの支出、市税や手数料などの収入といった「公共資産整備収支の部」と「投資・財務的収支の部」に含まれない日常的な行政活動に係る収支を計上しています。

【普通会計】

普通会計資金収支計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

経常的収支の部	38億4千3百万円
公共資産整備収支の部	6億7千6百万円
投資・財務的収支の部	25億5千3百万円
当年度資金増減額	6億1千4百万円
期首資金残高	6億8百万円
期末資金残高	12億2千2百万円

公共資産整備収支の部では6億7千6百万円の支出超過、投資・財務的収支の部では25億5千3百万円の支出超過となっています。経常的収支の部では38億4千3百万円の収入超過となっており、この経常的収支の黒字分を、公共資産の整備や地方債の償還などに充てていることがわかります。

これらにより、平成20年度一年間で6億1千4百万円の資金が増加し、期末資金残高の12億2千2百万円を翌年度の財源として繰り越すことになります。

【連結】

連結資金収支計算書を簡単に表すと、次のとおりです。

経常的収支の部	41億9千7百万円
公共資産整備収支の部	1億2千2百万円
投資・財務的収支の部	35億8千6百万円
翌年度繰上充用金増減額	7千7百万円
当年度資金増減額	6億5千6百万円
期首資金残高	17億4千3百万円
期末資金残高	23億9千9百万円

経常的収支の部で41億9千7百万円の収入超過、公共資産整備収支の部で1億2千2百万円の収入超過、投資・財務的収支の部で35億8千6百万円の支出超過となっています。

連結においても普通会計と同様、経常的収支の黒字分を、地方債の償還といった投資・財務的収支に充てており、この結果、23億9千9百万円を翌年度の財源として繰り越すことになります。

【財務書類の用語説明（主なもの）】

（１）貸借対照表

- 公共資産・・・土地や建物、道路など長期にわたり住民サービスの提供に使用されるもの
 - ・ 有形固定資産・・・取得原価（その年度の支出額）を基礎として算定したもので、昭和 44 年度以降の決算統計数値の累計額から減価償却累計額を除いた額を計上
 - ・ 売却可能資産・・・遊休資産や未利用資産等の売却可能な資産
- 長期延滞債権・・・地方税等の収入未済額のうち、１年以上未収となっているもの
- 未収金・・・地方税等の収入未済額のうち、今年度新たに発生したもの
- 回収不能見込額・・・「長期延滞債権」及び「未収金」のうち、回収不能と見込まれるものをそれぞれ計上
- 退職手当引当金・・・年度末に全職員が退職すると仮定した場合に必要な退職手当見込額
- 賞与引当金・・・翌年度に支払予定の賞与のうち、今年度の負担相当額を計上
- 公共資産等整備国県補助金等・・・公共資産を取得する際に、国及び県から受けた補助金額（減価償却分を除いた額）を計上
- 公共資産等整備一般財源等・・・公共資産等の形成のために充てた一般財源を計上
- その他一般財源等・・・公共資産等の形成以外に充てられた財源を計上

（２）行政コスト計算書

- 退職手当引当金繰入等・・・将来の退職手当のうち、今年度に発生した分
- 物件費・・・行政サービスを行うために必要な委託料や消耗品・備品の購入費等
- 維持補修費・・・施設等の維持修繕に要する経費
- 社会保障給付・・・児童手当の支給費や生活保護費等

（３）純資産変動計算書

- 期首純資産残高・・・前年度の「貸借対照表」における純資産の額
- 純経常行政コスト・・・今年度の「行政コスト計算書」における「（差引）純経常行政コスト」を計上
- 一般財源・・・地方税等、財源の用途が特定されず、どのような経費にも使用することができるもの
- 補助金等受入・・・国及び県から受けた補助金等
- 期末純資産残高・・・今年度の「貸借対照表」における純資産の額

（４）資金収支計算書

- 経常的収支・・・市の経常的な行政活動に係る収入と支出で、下記の「公共資産整備収支」及び「投資・財務的収支」に含まれないもの
- 公共資産整備収支・・・公共資産の整備等に係る支出とその財源（収入）
- 投資・財務的収支・・・出資金、貸付金、地方債の元金償還額等の支出とその財源（収入）